

今、卒業証書をお渡しした六十名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

みなさんとの出会いは、昨年4月でした。校長となり、これまで務めたことのない城端中学校へ赴任することとなり、不安を抱いてこの地へ来た時の気持ちは、今でもはっきりと覚えています。そんなわたしを安心させてくれたのは、みなさんの「温かさ」でした。

朝、教室の前を通っただけでも、その空気を感じるできませんでした。多感な中学時代、楽しいことばかりではなく、うまくいかないこと、納得できないこともあったと思います。それでも、行事の時も、テストの時でも、どこか楽し気で、何かやる気が伝わってくる、そんな「温かい」雰囲気、みなさんからは感じられました。これまで、どんな経験をしてきたのだろうと思い、学校の記録にある写真やたより等を見ってみました。

コロナ禍の中で入学して以来、マスクの着用を求められ、時には集会もオンラインとなり、今までできていたことが、何かしらの工夫をしないとできなくなっていました。そんな、制約の下で、多くの経験してこられたみなさんに、周りに気を配る、人を思いやる「温かさ」が生まれたのかもしれない。

みなさんのことをたどった記録の一つに、「城端時報」という、今年で創刊100周年の地域新聞がありました。記念講演会などにも出席させていただき、城端を愛する方々の熱い思いで続いている新聞であることを聞かせていただきました。学校にも、綴じてあるファイルがあったので、卒業生が生まれた平成20年あたりから見直してみました。

曳山祭が全国放送されたこと、集中豪雨で大きな被害を受けたこと、桜ヶ池でクライミングの全国大会が行われたこと、長く交流のあるアメリカのマルボロを表敬訪問したことなど…。そして、「生まれた人」の欄には、みなさんの名前がありました。小・中学校時代にあった出来事や部活動の記録などもあり、みなさんの成長が見守られているようでした。おそらく、城端の宝であるみなさんを、これからも見守り、そして支えていられるのだと思います。ここにも「温かさ」がある、と感じました。

今年の元日には、能登半島地震が発生しました。

今なお、不都合を感じながら生活したり、限られた場所で卒業式を行ったりしている様子が聞こえてくると、少しでも早く日常を取り戻せるよう願わずにはられません。

そんな地震の被災者支援のため、炊き出しを行ったり、チャリティーを呼びかけたりされ、困っている方に手を差し伸べる城端の方がおられることを新聞やニュースで知りました。先月末に行われた、つごもり大市も、復興支援という形がとられていました。

城端の方々は、とても温かく、思いやりがあります。そして、それを行動に移す強さがあります。ここ、城端は、そんな「温かさ」が育つところなのだということがわかりました。

個性豊かな卒業生のみなさんも、この城端中学校で、「自主自立」「誠心誠意」「不撓不屈」の校訓の下、仲間とかけがえのない3年間を過ごしてきました。もしかしたら、心無い言動で人を傷付けてしまったこともあるかもしれませんが、しかし、そんなことは繰り返さず、これからは、みなさんが決めた場所で、周りの人の「痛み」を感じ、みなさんの「温かさ」を伝えられる人になってください。

不安なときは、ふるさと城端を振り返ってみてください。ここには、みなさんを見守ってくれている人、支えてくれている人たちが必ずいるはずです。何も心配はいりません。

最後になりますが、みなさんのさらなる成長、活躍のたよりが聞こえてくることを楽しみにしています。わたしを含め、城端中学校の全教職員が、第七十七回卒業生のこれからの挑戦、そして頑張りを「温かく」見守っていくことを約束して、式辞といたします。

令和六年三月十四日

南砺市立城端中学校長